公益財団法人　埼玉県剣道連盟『広報誌』

剣風

公益財団法人
埼玉県剣道連盟

事務局　〒330-0074
さいたま市浦和区北浦和5-6-5
浦和合同庁舎4階
Tel (048)834-8869
Fax (048)834-8879
http://www.saitama-kendo.or.jp
（編集責任者　豊島正夫）

第７号　平成26(2014)年11月26日発行　（題字　野澤　治雄会長）

巻頭言

「青少年剣道講習会を主催して」

埼玉県立武道館長　桜井　勝利
（埼玉県体育協会副会長）

去る10月26日、県下各中学校の剣道部員の皆さんを対象に「全日本優勝者の青少年剣道講習会」を開催しました。その趣旨は、当館の設置条例で定める「武道その他のスポーツの振興とともに、青少年をはじめ広く県民の心身の健全な発達に寄与する」を踏まえ、次代を担う、剣道を志す中学生の夢を育むために企画させて戴きました。

講師は、全日本女子選手権３連覇を含む通算５回の優勝や世界大会団体戦をはじめ、各種国際大会で優勝の栄に輝くなど、女子剣道界の頂点を極められた村山千夏先生をお迎えし、県内中学71校240有余名の剣道部員や、各顧問の先生方の参加の下、盛会裡に開催することができ、主催者として、誠に御同慶に耐えません。ここに、講習会開催に際して、ご支援・ご協力を賜りました、（公財）埼玉県剣道連盟、埼玉県中学校体育連盟・同剣道専門部及び、講師村山千夏様が所属する埼玉県警察学校当局をはじめ、関係の皆様に対しまして、深甚なる感謝の意を表します。

講習会に参加された皆さんは、憧れの村山先生から指導を受ける幸せを胸に秘め、剣道の基本姿勢から技術に至る「お話や技の実践」を真摯な態度で、指導の一挙一動に傾注し、真剣に取り組む姿や、この講習会で初対面の他校の仲間と連携・協働し、礼節を弁えた整然かつ迅速な行動を拝見し、中学校剣道部生徒の皆さんは、本当に素晴らしいと思い、閉講式で「感動した」と申し上げました。

周知のとおり、昨今、指導者による暴力・体罰行為など、スポーツ界の負の側面が表面化し、内外で問われたことはスポーツに携わるものとして、残念であります。

私は、「武道の心技体を一体として鍛える」という一節を、武道以外のスポーツ団体や大会等のあいさつの中に盛り込み、武道の素晴らしさを伝えています。その事由は、武道が技術や勝敗の結果のみに拘らない理念の下、人間形成の道を求めているからです。

私は、日々の練習・強化が先行し、勝利至上主義や勝敗の結果にのみおぼれ、心の指導を疎かにした指導者から学び受けた人が、暴力行為の背景の一つと考えています。

本講習会に参加、かつ指導補助にもご協力賜りました顧問の先生方が、平素から武道の理念を踏まえ、部活指導に反映された成果として、「感動」する剣道部員が育まれたと存じます。ここに、顧問の先生方の献身的なご努力に敬意を表するものであります。

さて、私が武道館に着任して、「自他共栄」を基本理念の下、利用者が安心・安全かつ快適に利用出来る施設、利用者に喜ばれ親しまれ、かつ利便性を提供する運営を掲げています。その一例として、条例で定める開館時間は、９：00～21：00ですが、開会式の準備、又は体重別武道団体の大会が遅滞なく運営できるよう県当局の承認を経て、通常８：00～10：00を開館時間に変更。又競技団体の状況も斟酌し、７：00前後からの開館にも協力しています。

最後に、いま国は、より多くの人々がスポーツに親しみ、スポーツを楽しみ、支え、そしてスポーツを育てることを通じて、スポーツの持つ多様な意義や価値が社会全体に広く共有される「新たなスポーツ文化」の確立を求めています。その具現化を目指し、当館も鋭意頑張ってまいりますので、武道団体の皆様にもお力添えを戴きたいと存じます。

終わりに、公益財団法人埼玉県剣道連盟のますますの御隆盛、関係皆様のご活躍とご多幸を祈念申し上げて、巻頭言といたします。

〔執筆者紹介欄〕　日本ウエイトリフティング協会専務理事、アジアウエイトリフティング連盟会長、現全日本学生ウエイトリフティング連盟会長
1992バルセロナオリンピック、1996アトランタオリンピック監督

「大会記録この１年」（2014年後期）全国大会（上位）入賞結果・県予選会結果（報告）

順不同

――全国大会――

○全日本高齢者武道大会（６・９）
・団体の部　第２位　埼玉県
先鋒　大久保道夫　次鋒　筑井　祥二
中堅　渡辺　秀男　副将　川下　紘生
大将　山下美津男
・個人　寿Ｂ組　第３位　山下美津男（東入間）

○全国中学（8・18　高知市）
女子団体　第３位　春日部・大沼中

――全国大会予選――

○国体関東ブロック大会（８・24）
・成年女子　第２位
先鋒　渡曾　愛梨（筑波大付属坂戸高）
中堅　村山　千夏（埼玉県警）
大将　市村麻美子（日本女子体育大）
・少年女子　第２位
先鋒　菱沼日捺子（淑徳与野）
次鋒　中山　美紗（市立川口）
中堅　酒井　詩織（淑徳与野）
副将　宮沢　彩夏（埼玉栄）
大将　小島　彩加（埼玉栄）

○全日本剣道選手権大会予選（８・31）
第１位　米屋勇一（警察）
第２位　嶋田貴文（警察）
第３位　橋本桂一（東松山）

――関東大会――

○関東中学剣道大会（８・９,10）
・女子個人　第３位　磯　優莉香（新座二中）

――県内大会――

○実業団剣道大会（７・６）
・個人三段以下　①工藤　数馬（伊田テクノス）
・個人四段以上　①栄花　友彦（伊田テクノス）
・団体の部　①伊田テクノスＡ
吉村　翔　石山邦良　栄花友彦

○四地区対抗剣道大会（８・３）
①西部　②東部　③南部　④北部

○埼玉県杖道大会（10・13）
・個人戦　基本の部　①加子　晏楓（大宮武林会）
一級の部　①中島佑規子（久喜杖道会）
初段の部　①マクドエル・デービッド（久喜杖道会）
二段の部　①長谷川　雅（久喜杖道会）
三段の部　①杉崎　利春（久喜杖道会）
四段の部　①小山　大器（東入間支部）
五段の部　①永井　順子（埼玉杖神会）
・団体戦　①久喜杖道会　②大宮武林会
③浦和杖道会　③所沢杖道会

○平成26年度埼玉県武道大会（少年の部）（11・２）
・個人戦　３年生の部　①奥井亨陽（蕨）
②川崎友椰（久喜）③大野響真（上尾）③鈴木悠斗（越谷）
・個人戦　４年生の部　①鈴木優太郎（越谷）
②下田涼香（上尾）③小谷野晃（入間）③池田　翔（北本）
・個人戦　５年生の部　①岡田光昇（越谷）
②濟藤心楓（北本）③崔　瑳奏（朝霞）③岡本錬真（越谷）
・個人戦　６年生の部　①井上悠太郎（西入間）
②小川真英（越谷）③山本莞典（蕨）③戸坂空雅（飯能）
・団体戦　①越谷Ｂ（石川、上木、浅崎、池田、小沼）
②川口Ａ　③北本　③久喜Ａ

○第36回埼玉県剣道大会（中学の部）－団体戦（11・12）
・男子　①春日部・大沼　②川口・芝東
③北本　③春日部・緑
・女子　①川口・青木　②杉戸
③川越・城南　③久喜・菖蒲

○第52回県中学・新人大会個人戦（11・13）
・男子　①鈴木悠誠（北本）　②小川柊輔（川口・芝東）
③青木一真（川口・芝東）　③久保田優（春日部・大沼）
・女子　①野澤夏々（川島・西）②横川胡桃（春日部・大沼）
③髙木カノン（所沢・向陽）③関根加那子（杉戸）

○第59回埼玉県剣道大会（高校の部）－団体戦（11・22）
・男子　①元吉雄弥（埼玉栄）　②井田全信（本庄一）
③曽田峻平（本庄一）　③合田卓馬（市立川口）
・女子　①菱沼日捺子（淑徳与野）②前波萌乃香（埼玉栄）
③遠藤実穂（蕨）　③大島愛寧（本庄一）

○第59回埼玉県剣道大会（一般の部）（11・23）
・男子　四段以下の部　①足立柳次（警察）
五段以上の部　①嶋田貴文（警察）
・女子の部　①高橋佳菜子（警察）
・夫婦の部　①木村哲朗・美緒（狭山）

○県高校新人大会　団体戦（11・24,25）
・男子　①本庄一　②埼玉栄　③春日部　③立教新座
・女子　①本庄一　②淑徳与野　③埼玉栄　③農大三
☆男女１位校は全国選抜（2015・３・27～28）出場

「全日本優勝者による青少年剣道講習会」を指導して－埼玉県立武道館主催－

講師　錬士七段　村山　千夏（埼玉県警察学校　術科教養係長）

今回、「青少年剣道講習会」ということで、中学生を対象とした講習会の講師として依頼を頂き、指導の機会を頂きました。参加者は、70校、250人という大変大勢の中学生に指導をいたしました。

指導内容は、二時間という短い時間でしたが、この時間で中学生にどんなことを指導し、また“どれだけのことを教えてよいか”本当に悩みましたが、自分自身が中学生の時に経験したことが一番ではないかと考え、また、やはり応用よりも基本が大切

であるということを常に感じながら自分自身が考えて剣道を行っているため、そのことを中学生に伝えたいと考えました。素振りや切り返し、正面打ち等の打ち込みのポイントを話ながら、基本を中心に指導をし、最後に一緒に面を付け、回り稽古を短い時間で数本させて頂きました。

２時間という短い時間での講習会でしたので、中学生の皆さんに指導の内容がどれだけ伝わったかは分かりませんが、参加してくださった皆さんが、私の話を一生懸命聞いて、元気よく返事をし、頑張って教えたことをやろうという気持ちは、本当に指導をしていて、ひしひしと感じ伝わってきました。

逆に指導をしていた私自身が、中学生の皆さんからたくさんの元気を頂き、さらに頑張っていこう、努力をしようと感じることが出来た時間でした。

最後になりますが、今回このような機会を頂いた関係各位、協力頂いた方々に深く感謝いたします。本当にありがとうございました。

〔主な戦績〕全日本女子剣道選手権　第44・45・46・48・50回大会優勝　２位２回　３位１回／世界剣道選手権大会団体優勝（2003年イギリス、2009年ブラジル）／全国警察選手権大会優勝（2006年）／2004年彩の国まごころ国体団体優勝

頂点を目指して　「若き老剣士」“全日本高齢者武道大会を省みて”
――於日本武道館（６／９）――

埼玉県・大将　教士七段　山下美津男

第15回記念大会に初出場してから22年、第36回大会を迎え、「今年も大いに楽しんで来よう。」と参加しました。全国から北は北海道から、南は沖縄から『若い』高齢剣士が続々と武道館に集まって来ました。去年も一昨年もお会いした剣士が、元気に張り切って竹刀袋を肩にして武道館に入って行きます。皆さん楽しそうに表情豊かに挨拶している人、握手をしている人、これが高齢剣の嬉しい場面です。埼玉高齢剣の仲間も続々集まって来ました。過去の大会で、優勝・準優勝・３位に入賞した剣士も、今年も又元気に竹刀を交えて活躍しようとの意気盛ん。隣の席には、埼玉高齢剣と仲良く稽古をし試合をして来た東京・神奈川・茨城・福島・宮城と、闘志満々の顔ぶれが剣道具をつけて準備万端、いつでも来いとの気迫を見せて陣取っています。いよいよ開会式。全国から集まった500余名（剣道・銃剣道）が整然と並んだ光景は、鉄砲玉の下をくぐった人達（私も戦中派で三八銃をもって鍛えられた）の見事さ。君が代斉唱も声高らかに武道館の天井に響かせています。これが高齢剣の姿です。いよいよ試合開始で１回戦は沖縄チーム。はるばる東京まで来て、なにがなんでもとの気迫のこもった立会いでした。結果は２勝２敗１引分けの本数勝と薄氷を踏んだ勝利でした。２回戦は、団体戦・個人戦・稽古会と、何かと縁のある茨城チーム。顔見知りの先生方との対戦は、３勝１敗１引分の結果で準決勝に進みました。次は又々顔なじみの東京チーム、試合前はニコニコと「宜しく」と挨拶した顔が一変、すざまじい争いとなり２勝１敗２引分の結果で、いよいよ決勝戦の相手は神奈川チーム。私の相手も、毎年の様に個人戦で竹刀を交えた先生、お互い必死の争い。残念ながらチームは１勝２敗２引分けの準優勝でした。同チームとは、２回目の決勝対決でしたが、雪辱を果たせず。私は大将と重責のある立場に居ながら、仲間に又応援していただいた先生方に申し訳なく思っているところです。本大会を振り返ってみて、若いお年寄が、杖をついた先生が、背中の曲った先生が、いざ試合場に立つと、曲った背中が真直ぐに伸び、杖が竹刀に変ると剣先が喉元に決まり飛び込んで来ます。83才の私はまだまだ子供です。90才以上の現役が全国に百数十名もおられ、すばらしいの一言です。私達埼玉高齢剣も、毎月の定例稽古会を楽しみにしてる仲間が百数十名もいて、年１回の宮城大会・福島大会と参加して居り、すばらしい成績を挙げつつ頑張り楽しんで居ります。全国高齢剣大会は、来年も再来年も「若き老剣士」の活躍を待って居ります。埼玉高齢剣もますます充実し、若い剣士の見本になりたいものです。

“大会を終えて”左より雨宮正一県高齢剣会長と本県選手団

埼玉の剣道

「祖父　奥田芳太郎」

蕨市剣道連盟会長　奥田　昌利

初孫の私は、まわりがうらやむほどに祖父に可愛がられました。

今、ここに明治から昭和への大変革期を剣道一筋に生きた祖父を回顧することは、私にとっても意義深いものがあります。

祖父　奥田芳太郎（明16～昭44（1883～1969））の剣歴等の資料を参考に、その足跡を辿ってみたいと思います。

祖父の剣歴は、「12歳の頃から父・長蔵に剣道を学び、16歳の時、浦和明信館へ入門」に始まります。曾祖父（そうそふ）・長蔵について、『郷土の相撲（蕨市相撲連盟編）』の中では、“奥田長蔵は柳剛流を市田濱三郎に、また、小野派一刀流を高野佐三郎に学んだ剣客で、明信館第二支館蕨町の館長代理を務めた。また、「島田川」の四股名で県下各地の八幡講相撲に最高位の大関として招かれていた。接骨業。”と紹介し、『高野佐三郎（埼玉県立文化会館編）』に、“明治32年３月東京市九段下に道場を建て移転す。浦和明信館は壊し、浦和駅前体育ヶ原の一角に建設、ここには茂義が住居し、一切の運営をなす。”とあり、本文には“高野先生から最も寵愛されていた奥田芳太郎氏が父に連れられて来て剣道を始めたのもこの頃である。”と書かれております。

そして、『剣道一路（高野茂義著）』を見るに、“奥田などは、泣き泣き「今に先生だって俺が鍛えてやるぞ」と言ってぶつかってくる。ドーンとぶつかってくるのをかわして足を掬う。相手はどうっと道場の板の間に転ぶ。”と書かれており、当時の稽古の様子がうかがえます。

「一に稽古、二に稽古」と、両先生に厳しく鍛えられ、入門から５年、明治36年に祖父は、小野派一刀流剣法12ヶ条兵法目録を授与され、剣道家の道を歩み始めます。明治40年からは、埼玉県警察部（43年勤続）、武徳会埼玉支部、浦和中学校（35年勤続）、埼玉師範学校（29年勤続）、国鉄大宮工場、浦和商業学校と各剣道教師を嘱託され、日に３～４ヶ所、100～200人を相手に剣道を教える忙しい日々が長く続きました。

そして、『大正から昭和』の剣歴から「大正４年、大日本武徳会大演武甲種高点試合において優勝、銘刀一振を受領。大正９年、第五回全国中等学校剣道大会で浦和中学校が優勝」の輝かしい事績。さらに、満州遠征をはじめ、樺太、弘前、東北大学、舞鶴海軍学校、京都大会、全国警察大会等へ、選手、監督或いは講師や審判として出場する等、数多くの事績がみられ、これらを成就した祖父の強靭な体力、精神力には、ただただ敬嘆するばかりです。

昭和20年終戦。そして戦後は、剣道家にとって不幸な時代でしたが、盟友・鈴木淳巌先生との交流、恩師・高野茂義先生との再会は、祖父にとって“心の平安と明日への光明”であったのでは、と、今の私からは思えます。

鈴木先生は、月に１～２度は「兄貴元気ですか？」と自転車で来られ、ゆっくりしていかれました。また、満州から引き揚げ、荒川区町屋に居を構えられた茂義先生ご夫妻は、泊まりがけで来られ、大きな体の先生、明るく健康的な奥様は私達とも遊んでくださいました。奥様にご指導いただいた“金魚”運動は、今も忘れられないものとなっています。

写真前列左２番目より奥田芳太郎、大麻勇次、高野佐三郎、高野茂義、右端今井精一（浦中校長）の各先生（昭和11.6.2（1936年）旧浦中正面玄関にて）

剣道復活後の昭和28年、祖父は、新設の蕨警察署演武場に立ち、後進の指導を始めます。

昭和32年に範士号を受領。昭和36年11月26日には、剣道範士奥田芳太郎先生喜寿祝賀記念会によって“胸像”が建立されました。

この日は、除幕式に続いて、剣道大会、祝賀会が行われ、謝辞を述べる祖父の感激の顔が昨日の事のように思い起こされます。

祖父は80歳を過ぎても、しばらくは道場にも出かけましたが、その後は家にあって志藤義孝先生（範士・埼玉大学教授）、父・茂（教士七段・埼玉県剣道連盟副会長）からの剣道情報を楽しみにして聞いていました。祖父は昭和44年１月23日に86歳で亡くなりましたが、部屋には『克堪克忍（よくたえよくしのぶ）』（高野佐三郎書）が掲げられていました。

祖父に感謝。これからもお見守りください。

埼玉の剣道

「埼玉の剣道を支えた藩校教育」
－川越・忍（おし）・岩槻・岡部藩に観る－

埼玉大学名誉教授　大保木　輝雄

埼玉県内の大名知行は、幕藩体制の確立した寛永年間（1624－40）以降、**川越、忍、岩槻、岡部**の四藩のみとなった。江戸防衛の見地から、特に川越、忍（行田）、岩槻は重視され、城主は親藩や譜代の重臣が登用された。

藩校の成立は化政期（1804－29）以降であったとされる。この化政期は、11代将軍家斉の統治下、町人芸術は爛熟の極に達した時代だったが、綱紀が弛み、風俗も退廃したといわれている。その頃、県内では、自衛のために竹刀と防具を着用した撃剣が弘流し、豪農層による道場が多く設立された。また当時、各藩は、外国船の出没にともなう江戸湾近海の防衛にせまられ、藩校を設立し、各種学問はもとより、砲術を含む各種武術の訓練を組織的に実施奨励した。

『埼玉県教育史』によれば、「藩主たちは、子弟の幼い間は家庭で、成長すれば寺子屋、塾、道場等で、武士としての素養を培わせたのであるが、江戸前期においては、このような子弟教育を、藩士の責任において行わせ、藩としては何等の処置を講じない藩が多かった。しかし中期以降は、藩として積極的な教学施策を実施するものが増加した」とある。そして藩学の在り方は、藩主や藩の重臣たちがいかなる藩士像を期待したかによる、と示している。まずは師範家による文武の私塾の奨励と援助から始まり、藩校の設立へと移行する。武士本来の士風を刷新せざるを得ない状況となっていたのである。

川越藩の講学所が正式に発足したのは文政十年（1827）。天保14年（1843）には武術の総合稽古場を蔵町に建設。慶應３年（1867）、新領主松平大和守が川越に入封後は学問所長善館が設立され、武術教育への関心も高かった。剣術は、山田順左衛門（直真影流）、稲垣才蔵（平常無敵流）、渡辺与八郎（神道通心流）が師範家として赴任している。

忍藩は、進修、医学、兵法の三館を文化10年（1813）に設立。さらに、慶應４年（1868）培根堂、国学館、洋楽館を開設。剣術の稽古は、新陰流、清山一伝流、和田流、鏡心明智流の各師範家が自宅稽古場で教授していた。特に鏡心明智流の松田十五郎の功績は大きい。

岡部藩は陣屋での支配であったが、弘化年間（1844）に就将館が設立されていたが、嘉永２年（1849）に文武の学館として、学聚館と偃武館（えんぶかん）を開設した。陣屋内には武道場が設けられ剣術の師範は一刀流の塚越又右衛門が務めた。

さて、特筆すべきは岩槻藩の儒者児玉南柯の文武両道論である。

岩槻藩は、大岡家が宝暦６年（1756）に入封してから明治２年（1869）の廃藩置県までの８代、113年間にわたって統治された。領主と領民の関係はよく、親しみ深い藩侯であったとされる。寛政11年(1799)、藩侯に抜擢されていた儒者児玉南柯は私塾遷喬館を開設したが、それは後に藩校となった。武芸教育は師範宅で個人教授が行われていたが、文化八年（1811）、児玉南柯（1746～1830）の建言によって、遷喬館（せんきょうかん）と同じ敷地内に武芸稽古所が設置され、藩学として正式に位置付けられた。藩の儒者である南柯は、文武両道のかね合いは「**武を主として文を兼ねる**」よう心掛けるように諭し、自らもそれを実践していた。武芸稽古所の掟に「・・・武藝は其術其形にあれば、修業の次第によりて其高下立處（そのこうげたちどころ）に見え、その功も又速なり。文藝は是に異り、經傳に通曉し，講説水の流るる如くなりとも其行事はたのみがたく、其心術もいかにともはかるべからず・・」と示すように、武芸はその優劣は形に表れるので一目瞭然だし上達も早いが、文芸は様々な典籍を理解しているとしても、言うは易し行うは難しで、その心も推し量れないものである、と述べる。このような児玉南柯の認識は、剣術師範の見識を代弁するものではなかったか。

各藩の師範家は地元に残り、各地域で開設された豪農層の剣術道場に出向き、流儀の精神を伝授した。そのことは必然的に武士的人間の育成へと繋がっていったのである。忍藩と松田十五郎（一刀流）、川越藩と阿部親昵（ちかとも）（直心影流）、岩槻藩と村雨政陽（直心影流）の動向は『埼玉県剣道五十年史』で詳述したが、彼らの蒔いた種は、低迷した剣術の命脈を保ち、後に、学校教育への「正課編入」運動を起こし、国会で可決させた小澤愛次郎(1863～1950)、星野仙蔵(1871～1917)、そして近代剣道の父とも言うべき高野佐三郎(1862～1950)を生み、剣道界に多大な影響を残す人物を次々と輩出し開花させていったのである。

「我が師を語る」―黒田清次先生と浦和高校剣道部―

浦和剣道連盟会長　教士七段　小室　駿一郎（昭和39年度卒）

浦和高校創立100周年・黒田先生を囲む会（平成８年）

「まっつぐ」とは、黒田清次先生が旧制浦和中学校から浦和高校の教師として奉職された25年間に亘って数多くの生徒に貫かれた教育心情であり、剣道部の指導理念でした。先生は埼玉師範学校を卒業され、昭和18年に浦和中学の体育教師に着任、間もなく太平洋戦争の終結に続くGHQにより学校剣道が禁止、昭和25年の撓(しない)競技、昭和27年の剣道復活から県剣道連盟結成まで大変な尽力をされました。その後、浦和高校在職中は、剣道部の指導者として多くの生徒の育成に尽力されました。

浦和高校剣道部は、黒田先生の「真(ま)っ直(つ)ぐ」精神と厳しい指導の下、全国大会には昭和29年の剣道競技で団体出場以来、30年の撓競技で団体出場、34年には磯一雄、36年には杉谷攻、37年には井上泰一が個人で出場した。関東大会には昭和29年から34年までの６年連続、33年には国民体育大会（富山県）に出場、34年には関東大会（山梨県）で準優勝し、39年から42年までの４年連続出場する等、先生が昭和42年に異動されるまでの25年間に亘って多くの生徒を育成されました。

（昭30卒・矢嶋章司氏）

先生は曲がったことが大嫌い、授業が終わると道場に真っ直ぐ、稽古が終わると自宅に真っ直ぐ、剣道も真っ直ぐの姿が夢にまで浮かんだ。剣道の指導では基本を徹底し、自主性を尊重されたので、生徒はめきめき上達し、全国大会予選において宿敵不動岡高校を破り第１回全国高等学校剣道大会（日光市）に出場することができた。

（昭33卒・村山正佳氏）

先生の剣道は気合が入っているかどうかを常に求められました。先生と生徒が精神だけで向かい合う、心は豊かだったことを思い出します。口癖の「まっつぐ」とは弱い気持ちになると横向きになる、怖いけどやってこいということだと思います。

（昭34卒・渡邉洋一氏）

黒田先生の剣道からは、器用ではないが一本・まっつぐにすべてをかけて打ち込んでいく基礎基本と精神的な強さを学びました。昭和33年富山国体に出場したときに、永平寺で座禅を組まされたことは良い思い出となっています。今も剣道を続けているには先生の人柄のおかげです。剣道を通じ人間として鍛えていただいたことに感謝しています。

（昭35卒・小林（磯）一雄氏）

私にとって剣道の原点である、気合をいれること、先をとること、勝負にしぶとくなることは、先生よりご指導いただいた貴重な教訓です。県大会優勝、関東大会準優勝、全国大会、国体等良い結果を出せたことはいまでも誇りに思っています。

（昭36卒・大塚健司氏）

私が１年生の頃、他校の上級生が１年生に防具を担がせているのを見て「自分の防具を持てなくてどうするか」と怒り出したことが忘れられません。稽古の時は「辛いか、辛い時が一番」と声をかけていただいたことも大切な思い出です。

※写真、卒業生（談）は浦和高校剣道部誌「まっつぐ」から引用

埼玉の剣道

『父　小澤丘を語る』

東京理科大学教授　教士八段　小澤　博
（盈進義塾興武館々長）

私は昭和25年（1950）１月３日、父50歳・母42歳の時、８人兄弟姉妹４男４女の８番目として羽生市で生まれました。高校を卒業するまで羽生で暮らし、それ以後東京で生活しています。30歳の時に、住居と勤務地の都合で連盟の所属を埼玉から東京へ移籍しました。以来35年間、国体や都道府県対抗その他全国規模の大会では心の中で密かに埼玉を応援していました。今年８月、栃木県小山市で行われた国体の関東ブロック大会の折、野澤治雄会長から原稿執筆の命を受け、心の中につかえていたものを払拭する機会となりました。感謝申し上げます。

まず、父と過ごした41年間を思い返しましたが、父は私に対して、「こうすれば試合に勝てる、こうすれば当たる、上手くなる。」ということを全く教えてくれませんでした。話を切り出すときは、必ず祖父小澤愛次郎を引き合いに出して剣道のことを話しました。

「愛次郎お爺さんは、若い時農閑期を利用して山岡（鉄舟）先生の所で内弟子修行をした。明治時代に剣道・柔道を中学校の正課にするために尽力した。明治時代の選挙のやり方はこうだった。政界を引退したあと、本当の修行に入った。鞍馬流の柴田衛守先生に、『ノロハヤの剣』を教わった。鍔に臍を乗せろと言っていた。山岡先生には、『気当たりの剣道』を教わった。また極意を教えてもらった。その極意とは…」と、これも技術的なことではありませんでした。他にも沢山話をしてくれましたが、「私は」ではなく、「愛次郎お爺さんは」という前置きが必ずありました。剣道を語る前に、私たちの先祖はこういう事をし、こういうふうに生きたのだと伝えようとしたものと思います。そして私に対しては、「下手でもいいから一生懸命稽古し、一生懸命生きろ、平凡でもいいから「勤勉」に一生を過せ。」と伝えたかったのでしょう。

私の剣道人生は、一般に稽古事を始める年齢の６歳の６月６日から父の手解きで始まりました。その２ヶ月前の４月から、高校を卒業したばかりの野澤治雄会長が、内弟子として我が家の一員となり、丸１年間一緒に過ごしました。父からは切り返しと掛り稽古、野澤会長にはもっぱら足捌きを教えていただきました。以後、羽生興武館で父と稽古する時は、六段を取得するまでの20年間切り返しと掛り稽古だけの稽古でした。

小・中学生の時は、道場に通ってくる子供たちにも分かるように「１回の稽古は半紙をそおっと１枚重ねるように大事に行い、100回やれば100枚溜まるよ」と、高校生になると「雨垂れ岩を穿つ」と教えてくれました。大学の上級生になった頃は、「下から掛かる者は伸びる」と言って、文京区音羽にある講談社野間道場で自ら示してくれました。

私は19歳の夏、父に連れられて講談社野間道場に入門しました。今でも目に焼き付いていますが、持田盛二範士十段は83歳、父が69歳の時、稽古時間の最後に、父が持田十段に掛かっているところを何度も見ました。５～６分前後の地稽古の後、掛り稽古と切り返しをしていました。私はいつも鏡の前の末席から見ていましたが、息は上がりフラフラになりながらの切り返しでした。九段が十段に切り返しと掛り稽古をするのを見て、大変な道場へ入門してしまったと思いました。

六段を取得した年の夏、「二人だけで稽古しよう」と言われ、30～40分間地稽古をしましたが、悔しいくらい１本も当たりませんでした。風呂で父の背中を流していたらこう言われました。「これからは少し地稽古の工夫をしなさい。」工夫しろと言われましたが、こうした方がいいという言葉はありませんでした。26歳が76歳に何故勝てないのか、剣道の奥深さを初めて知った瞬間でした。

これからいろいろなことを教えてもらおうと思っていたところ、３年後の79歳のとき、明治村の大会が終わって帰宅した翌日、突然脳血栓で倒れました。血圧は低いほうだったのですが、日常が忙し過ぎたのが原因だったと思います。翌日枕元に呼ばれこう言われました。「お前にはもう稽古をつけてやることが

できなくなった。これからは山内（冨雄範士）先生の指導を受けろ。」山内先生の家系は旧小諸藩士で、代々藩主の幼少時に養育係を担当した家柄、そして先生自身は戦前祖父愛次郎のもとで内弟子修行をした謹厳実直そのものの人でした。

私は子供の頃から、「ちょっと目を離すと糸の切れた凧と同じで、どこへ飛んで行くか分からない子だ」と言われて来ました。親というものは子供の性格を良く見抜いているものだと思いました。倒れた翌日というのに、山内先生に預けておけばちゃんと稽古をするだろうと思ったのでしょう。それ以後先生が85歳で竹刀を置くまで、講談社野間道場と興武館で約20年間御指導を頂きました。

私が山内先生に指導を受けている間、父は稽古は出来ませんでしたが、病院を退院してからリハビリに励み、４年後の83歳の時、３歳の私の長男と手を繋いで道場の中を杖なしで歩けるようになりました。それを見て、「五行之形をやりましょう。そしてもう一度京都大会で演武しましょう」と誘いました。剣士としての血が燃えたのか、体の捌きが見違えるようになり、顔の色艶も良くなりました。写真①は昭和61年（1986）５月４日、86歳のとき京都市武道センターを会場に開催された京都大会で「小野派一刀流五行之形」を父と演武したときのものです。「古流」は剣道の原点だから大事にしなければいけない、というのが口癖でした。京都大会では毎年、「鞍馬流」の形も岡田守弘範士と演武（写真②）していました。

写真①

写真②

今でも懐かしく思い出すことがあります。私が38歳の時、正月休みに羽生の自宅で二人きりになりました。「もう少しで40歳になるので、『剣道の極意』を教えて欲しい」と思い切って言ってみました。

「剣道の極意はなんですか」と尋ねましたら、たった一言「それは自分のことは自分ですることだ。」不思議に思いながら、「やってます。」と答えたら、こてんこてんにやられてしまいました。「君は子供の時、朝飯は誰が作ってくれた？」「お母さんです。」「米は誰が作った？」「農家の人です。」「君は七段になり大分上達したが、誰に教えてもらった？」「初めはお父さんと野澤先生、高校では諸貫先生と山中先生、大学では山内先生、阿部先生、志澤先生その他です。」（他にもいろいろ聞かれましたが）

「さっき自分のことは自分でやっていると言ったが、自分では何もしていないじゃないか。」「ではどうしたらいいのですか？」と尋ねました。

「人が生きる、生活する、仕事をする、剣道が上手になるということは、誰かに助けられているし、剣道をここまでやって来られたのは、多くの先生や剣友がいたからだ。だからそういう人たちに感謝することだ」と教えられました。「剣道の極意」は師や友そしてお世話になった人に「感謝すること」を教わりました。88歳の時でした。そして、それから３年後に91歳で亡くなりました。今思うと、あれが最後の剣道の話でした。「剣道の極意」とは技だけではないと改めて感じます。もしかしたら、「感謝すること」とは人生の極意かも知れません。因みに、父は自宅で風呂に入ったとき、下着は自分で洗い、物干し竿に掛けていました。懐かしい思い出です。このような機会を与えて下さいました野澤治雄会長はじめ埼玉県剣道連盟の皆様に感謝申し上げます。

加盟団体紹介（その⑦）

所沢市剣道連盟　－自己の研鑽と青少年の育成－

会長；島崎　隆男　　事務局長：北田　　正

1．沿革　所沢では、昭和６年５月10日に「所沢地方武道奨励会入間川支部発会記念武道大会（剣道・柔道・弓道）」、同年11月22日にも「同大会秋季第２回武道大会」が、剣道部審判長高野佐三郎範士のもとで盛大に開催されている。審判員には小澤愛次郎範士の名もある。両大会の組合表には少年から成人まで、市内や近隣からの500人以上の出場者名があり、旧家の姓が多く戦前も剣道が盛んであったことが推察される。

戦後の低迷期を経て、徐々に剣道愛好者の増加があり、昭和28年に所沢市剣道連盟が結成された。当初は歴代所沢警察署長が会長となり、昭和39年からは地元の剣道愛好者が８代に亘り会長を務め、今日に至っている。

2．活動状況　市内には15の支部があり、それぞれに青少年等の指導・育成に努めている。連盟では、これら支部指導者を含む連盟会員の技倆向上のために、毎週火・金曜日に市民武道館で合同稽古を行っている。近隣からの参加もあり、年間延べ約2300名が稽古している。

また、元警視庁主席師範遠藤正明範士が市内や近隣の中・高校教員や連盟会員等有志の指導に当たり、技倆向上に寄与している。一方市内の15中学校には全て剣道部があり、一部の中学校では、連盟会員が外部指導者として部活動に関わっている。

◎青少年剣道大会　小・中学生を対象とした大会で、春季に開催する。今年で63回目となる。
◎三道大会　青少年育成所沢市民会議が主催する剣道・柔道・弓道の大会で、秋季に開催する。剣道の部は、小・中・高校生を対象とし、今年で55回目である。
◎市民剣道大会　新年に開催する成人を対象とした大会で、今年で35回目となる。
◎所沢市長旗争奪剣道大会　剣道連盟が主催者となり、高校・中学教員と連盟会員有志が実行委員会を組織して開催する中学生を対象とした大会で、今年で27回目である。関東一円から多くの参加があり、レベルの高い大会となっている。
◎市民武道祭　市民武道館の利用団体が、それぞれの演武を披露する。剣道連盟も各支部持ち回りで参加し、市民への啓発に努めている。

川口市剣道連盟　－不動心－

会長：小倉　順二郎　　事務局長：和泉　征二

1．沿革　川口市は「鋳物の街」として、その歴史を徳川時代まで遡ると、川口市の剣道の歴史も随分と古い歴史を持っており、長年に渡り幾多の先達の血と汗による尊い献身的な努力と精進が積み重ねられて今日の盛況と繁栄があります。

昭和28年（1953）川口市剣道連盟が発足。浜田治雄氏を会長に、副会長に浅倉一二三氏、岡芹邦男氏、楯政知氏を始め多くの指導者の下、今日の川口市剣道連盟の基礎が築かれた。

昭和44年（1969）念願の川口市立体育武道センターが竣工落成となり、磐石の体制が出来たのを機に、川口市剣道連盟事務局を設立し、埼玉県剣道連盟の傘下に入り、同時に武道館少年剣道クラブを設立、翌々昭和46年（1971）に少年剣道大会、昭和58年（1983）に中学校剣道大会・平成元年（1989）より、高校剣道大会を連盟行事として実施し、青少年の育成強化に力を注いでいる。

平成23年（2011）、川口市・鳩ヶ谷市が合併し、更に大きな連盟組織となる。

2．組織及び事業　現在19団体が加盟、一般・大学（600名）、高校生（150名）、中学生（520名）、小学生（350名）と区分され、主な年間行事は、７月少年少女剣道スポーツ大会・市民選手権大会、10月市民体育祭、11月級審査会・川口市審判講習会、12月小学生剣道選手権大会、１月高等学校剣道大会、２月中学校剣道大会、３月少年剣道大会を行っている。また、年間４回川口市全体の強化稽古会を実施している。

3．今後の取り組み　平成22・25年埼玉県剣道大会（小学生の部）優勝を始め、優勝11回の実績を持つ。市内中学校は、県大会優勝男子団体18回、女子団体６回と活躍している。また、県立川口高校、市立高校の川口・川口総合も関東・全国大会・国体等、輝かしい成果を残している。『剣道は剣の理法の修練に依る人間形成の道である』という理念のもとに、川口で生まれ川口で育った選手が地元に戻り、後輩の指導・育成に尽力できるよう、さらには剣道を通して平和と社会に貢献する人材育成に心掛け、これからも小・中・高の一層の育成強化を連盟あげて取り組んでいきたい。

児玉郡市剣道連盟（本庄支部）　―青年育成の一助を担う―

会長：長谷川欣司　　事務局長：石綿　俊文

＜沿革＞　当支部は、北部に群馬県の美しい山々がパノラマに広がる県境に位置する本庄市（児玉町は本庄市へ合併）、上里町、神川町、美里町、上泉町の１市４町の児玉郡市によって構成されている。

昭和27年、全日本剣道連盟並びに埼玉県剣道連盟の設立に伴い、当支部も初代会長櫻井正則先生を中心に前述１市４町の諸先生方のご尽力により結成された。

組織の本格的活動は、昭和40年代に入り、中島弘先生、小岩井友治先生、奥澤孝三郎先生のご指導のもと、本庄警察署道場にて、青少年剣道の指導、育成の橋頭堡となり、昭和48年には、現在の児玉郡市青少年育成剣道大会の前身である「青少年家族剣道大会」第１回が開催され、更に活性化した。当大会は昨年（平成25年10月）第40回が開催され、郡市のみでなく近隣の各団体にも参加いただき約500余名が出場、年々充実した大会に発展、継続している。

この40年間の支部長（児玉郡市剣道連盟会長）には、櫻井正則（初代）、小岩井友治（第２代）、奥澤孝三郎（第３・５代）、瀬下一夫（第４・６代）、坂田修一（第７代）、髙野富男（第８代）の各先生方が就任され、剣道を通して青少年育成の情熱を引き継ぎ、今日の充実した組織の構築に至っている。

＜活動状況＞　本庄支部剣道連盟内団体（１市４町）の主な大会開催と稽古日

・本庄市剣道連盟（火・土・日／本庄市武道館／本庄市民剣道大会）・本庄剣道スポーツ少年団（火・土・日／本庄市武道館／本庄スポーツ少年剣道交流大会）・上里町剣錬会（火・金／上里町多目的ホール／上里町青少年育成剣道大会）・上里町剣道スポーツ少年団（火・金／上里町多目的ホール）・児玉剣道教室スポーツ少年団（木・日／児玉町体育館・美里武道館／本庄市民剣道大会）・神川町剣錬会（金／神川中学校武道館）・響生館（月・金／本庄第一高等学校体育館）・児玉警察剣道教室（木／美里武道館）

支部指導者は（組織会員62名）は、以上の各団体活動において小中学生を中心に指導、育成に努める他、支部内外の出稽古を活発に行い、相互に交流を深めながら己の精進を重ねている。

＜支部の主な活動と抱負＞　①前記した青少年育成剣道大会の充実と継続を柱に近隣の剣道スポーツ少年団並びに団体との更なる交流と時代を継ぐ青少年の育成を推進する。②三級から一級の審査会開催と受審者対策の「木刀による剣道基本技稽古法」の講習会を実施し、正しい剣道の普及を図って行く。③初段から三段の段審査前に予備審査会を開催し、教士七段の先生方から昇段へのアドバイス及び日本剣道形講習を行い、生涯剣道に繋がる正しい剣道の習得と、昇段による目標達成の喜びによって今後の励みと飛躍の糧になる様努めていく。以上の活動を基本に剣道を通し次世代に耐える青少年の強靭な心身、正しい礼儀、謙譲の心等、育成の一助を担うべく支部一丸となり活動していく所存である。

草加市剣道連盟　―更なる発展を目指して―

会長：増田　吉男　　事務局長：岡島　信保

１、沿革　昭和31年５月、草加町青少年育成指導のため、埼玉県、草加町及び篤志家の寄付金等により50坪の柔剣道場が建設されました。初代会長は、草加市体育協会長でもあった小川孝氏が就任し、草加と近隣町村の剣道愛好家が集まり稽古を始めたのが起こりとなりました。都内や県内近隣団体と交流を図るとともに次第に愛好家が増え、昭和37年５月に埼玉県剣道連盟に加盟し、初代会長小川孝、初代支部長宇田川安太郎、外30名以上が登録して「埼玉県剣道連盟草加支部」として発足いたしました。

歴代支部長は、第２、４代田中政男、第３代久保重雄、第５、７代久保和雄、第６代安藤誠、歴代会長は、第２代久保重雄、第３代田中政男、第４代松本厚、第５代宇田川隆が就任しました。

かつては、草加市連盟本部、支部の運営でしたが、現在は、草加中央剣友会、松原剣道スポーツ少年団、花栗剣友会、谷塚剣友会、稲荷剣志会、獨協大学、雄真館、高砂少年剣道会の各支部共同参加型運営を図るために、第８代加盟団体長また第６代会長を増田吉男（松原）、副会長を千田保夫（草加中央）、浜島成行（花栗）、長谷川武志（谷塚）、理事長小橋賢（草加中央）、事務局長岡島信保（草加中央）が就任した。

２、今後の目標　本連盟の重点目標は、１、剣道人口の増加策としてスポーツ・フェスティバル、武道祭り、体験教室、報道機関への積極的情報発信等。２、資質の向上策として各種講習会への参加促進、市内中堅指導者講習会・小学生の選抜稽古会等の開催等。３、組織の強化策として各支部間の支援と親睦、規約の整備、大会や審査会（段・級）等の協力体制等を掲げて活動をしています。

今まで培われたよき伝統を継承しながら、更なる会員相互の融和と研鑽に努め、次代を担う青少年の健全育成への寄与と正しい剣道「人間形成の道」を伝える努力を継続していきたい。

あとがき　先人の偉大な足跡を訪ねつつ第７号の発刊となった。埼剣連の動向をタイムリーに発信するように内容を整えつつ、毎号ホームページへのアクセス数は、1700件に及んでいる。今後とも、編集に意を尽くしたい。（豊島）

＜訂正＞第６号埼玉の剣道「甲源一刀流」の記事中、「髙野弘正剣道教士（佐三郎の弟）」とあるのは「次男」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。